

7日間彼氏 2

Miyuki & Daisuke

里崎 雅

Miyabi Satozaki

eternity



エタニティ文庫

目次

無期限彼氏

285

7日間彼女、前夜

231

7日間彼氏 2

5

7
日間
彼氏
2

プロローグ　　～美雪～

「七日間、お前の彼氏になってやるよ」

つい八日前に言われた言葉を思い出し、駅のホームに佇たたずんでいた藤崎美雪は顔を赤らめた。

意味深なそのセリフを言ったのは、美雪にとつてずっと憧れの上司でしかなかった松沢大輔まつざくだいすけ。彼とは、昨夜本当の恋人になったばかりだ。

新年三日目のホームには、帰省を終えて戻ってきたと思われる家族連れの乗客がちらほら見られる。まだ早い時間帯なせいかあまりその数は多くないが、これから時間を追うごとにUターンの乗客で溢れていくだろう。

美雪も今日と明日で、少し離れた実家に帰るところだった。本当は、大輔の傍そばで昨日の余韻よゝいんに浸りたかったのだけれど……正月休み中に帰省することを両親と約束していたから、すっぱかすわけにもいかない。

駅まで車で送ってくれた大輔とは、入口で別れたばかりだ。ほんの少しの時間でも離れることは寂しいけれど、大輔は「焦る必要も、不安に思う必要もない」と言ってくれた。別れ際にされたキスを思い出し、美雪は笑みを堪こらえるように唇をきゅつと引き締めた。気を取り直して顔をまっすぐに上げた時、聞いたことのある声が背後から聞こえた。

「あれ？　美雪じゃない？」

驚いてうしろを振り向くと、そこにいたのは短大時代の友人、理子りこだった。結婚を決めた彼女の隣には、婚約者の佐々木が寄り添っている。

「やっぱり。奇遇だね」

「本当、こんなところで偶然だね。二人でどこか行くの？」

「えー？　昨日、結婚報告の挨拶あいさつ回りに行くって教えたじゃない。ひとまずこれから私の実家に行って、それから両親と一緒に親戚のところだよ」

昨夜に短大仲間が開いてくれた飲み会は、新年会とは名ばかりで、実際は初めて彼氏ができた美雪の「彼氏お披露目会」だった。理子もそこに婚約者を連れてきていて、たしかに帰り際、そんなことを言っていたような気がする。

「あ、ごめん。そう言ってたよね」

あまりに色々なことがありすぎて、美雪は理子が言っていたことをすっかり忘れていた。誤魔化ごまかすように笑ってみせると、理子の隣に立っていた佐々木が美雪に会釈えしやくした。

「美雪ちゃん、昨日はどうも。理子、ちょっと飲み物と新聞を買いに行ってくるよ。何かいる？」

「じゃあ、カフェオレをお願い〜」

わかった、と言いい売店へと歩き出した佐々木の姿を見送った後、改めて理子が美雪に向き直った。

「美雪は一人でどこ行くの？」

「理子と同じく実家だよ。大晦日と元旦、うちの親は温泉に行ってたから、お土産を取りに来いって言われて。お正月休みを逃しちゃうと、次はいつ帰れるかわかんないし」

「そっか。それにしても昨日は驚いたなあ。美雪の彼氏が、あんなにカッコイイなんて！」

本当は、昨夜の飲み会の段階では大輔はまだ正式な彼氏ではなく「契約彼氏」でしかなかった。そのことを思うと、少しだけうしろめたい気持ちになる。

そもそも、美雪と大輔の関係が変わったのはわずか八日前のことだ。それまでは、お互いの胸のうちは別として、ただの上司と部下の関係でしかなかった。

それは、美雪が久しぶりの友人たちとの飲み会の席で些細な意地から「彼氏がいる」と嘘をついてしまったことから始まった。美雪に生まれて初めて彼氏ができたと思じた友人たちは大いに盛り上がり、強引にお披露目の場をセッティングされてしまったのだ。身から出たサビとはいえ、落ち込みながら帰宅の途にいた美雪の前に現れたの

が——何故だか道端で泥酔状態の八歳年上の上司、大輔だった。彼の友人に頼み込まれ軽い気持ちで大輔を引き受けた方がいいが、彼の家がわからずどうすることもできなくて、結局美雪は自分の家に連れて帰った。それは大輔にとって嬉しい誤算であったことを、知るはずもなく——

目覚めた時、別の布団に寝かせたはずの大輔はいつの間にか一緒のベッドの中にいて、しかも美雪は彼の腕の中だった。二人の間に何も無いのはわかりきっていたが、何故彼が美雪と一緒に寝ていたのかは謎なままだ。

ふとしたことから美雪の事情を知られてしまい、大輔は一晚世話になったお礼として、彼氏お披露目をかねた飲み会までの七日間、彼氏役を買って出してくれたのだった。

「昨日も言ってたけど、松沢さんの方から美雪に付き合おうって言ったって本当なの？」

「ちょっと理子。今の言い方、何かビミョーに失礼な気がするんだけど……」

「ごめんごめん。でも『俺が彼氏になってやるよ』って言われたんでしょ？」

「まあ……それは嘘ではないけど……」

嘘ではないが、それは七日間だけの契約の言葉で、実際先に告白したのは美雪の方だ。練習のためにと連れ出してくれたデートや一緒に過ごす時間の中で、美雪はどんどん大輔に魅かれていった。これは恋の練習、男性に免疫のない自分に機会をくれているだけ——そう思って気持ちを押し込めようとしても、止めることはできなかった。

年も離れ、女性にもモテる彼を好きになっても辛くなるだけ。気持ちに蓋をして、ただ七日間の彼女気分を堪能すればいい。そうは思っても自覚してしまった気持ちはどうしようもなく、デートの最後にプレゼントされたダイヤのネックレスをまといながら、いつしか本当の彼女になれることを望んでしまっていた。

彼の気持ちが見えないままされたキスに、美雪の気持ちはなお募った。結局、約束の期間終了を待たずに勇気を出して大輔へと告白するものの、はっきりとした返事のないまま七日目の飲み会を迎える。

でも、不安に揺れる美雪を待っていたのは、スペシャルな八日目だった。

『俺はこの七日間で、絶対にお前を落とそうって決めてたよ』

美雪を抱いた後に大輔が言ったその言葉は本当なのか、今でも信じられない。

「美雪？ どうしたの、ぼーっとしちやって」

ぼんやりとこれまでの日々に関心を馳せていた美雪の顔を、理子が不思議そうに覗き込んだ。

「え、あ、ごめ……きやつ！」

慌てて答えようとした瞬間、突然ホームを強い風が吹き抜けた。電車を待つ人々も口々に驚いたような声をあげ、美雪と理子も慌てて衣服を押さえる。

「わ、びっくりしたー」

乱れた髪の毛を手櫛で整えていると、ふいに首元に理子の視線を感じた。

「美雪、昨日はお泊まりだったんだ〜」

「え？ なんで？」

含み笑いで指摘され、不思議に思っただけに手をあて——昨夜、大輔から首元を執拗に愛撫されていたことを思い出した。と同時に、それに伴ういろんなシーンが蘇り、顔が一気に赤くなる。

「そんなところに堂々とキスマークつけて！ 飲み会の時は絶対なかったよね!? 意外と

松沢さんって、独占欲強いタイプ？」

「ち、ちがつ、これは」

必死に言い繕おうとしたが、事実だけに言い訳が思いつかない。

「私に言われたくらいで慌てちゃって、そんなんで実家帰って大丈夫ー？ 親にバレないように気をつけなよっ」

「うん……気をつける」

首元を手で隠したまま思わず俯いた美雪の背中を、理子が笑いながらポンポンと叩いた。

「次のゴールインは、きつと美雪だねー」

「そんなことないってば!!」

反論しかけたところで、こちらへ歩いてくる佐々木の姿が見えた。これ以上失態を晒すわけにもいかず口を噤むと、なおさら理子は可笑しそうにしていた。

「あ、美雪の乗る電車、来たんじゃない？」

電車の到着を告げるアナウンスが流れ、遠くに青い車両の姿が見えた。

「そうみたい。じゃあ理子、またね。挨拶回りがんばって」

「ありがとつ。松沢さんを交えて、今度飲みにも行こうねー！」

ひらひらと手を振りながら理子は佐々木のもとへと駆けて行き、佐々木もまた遠くから美雪に軽く手を振った。

幸せそうな友人のうしろ姿を見つめながら、想うのはやっぱり大輔のことだ。

昨夜、別れた時間が随分遅かったのに、実家に帰る予定のある美雪を彼は早朝から迎えに来てくれていた。ちよつとの時間でも会いたくて、少しだけでも傍にいたい。そんな気持ち、わかってくれているのだろうか。

(もしかして、大切にされてる？ なーんて……)

身体に残るところか甘い痛みと違和感は、昨夜の出来事が夢ではないことを証明している。火照った顔を冷ますように、美雪は深呼吸して冷たい手の甲を頬にあてた。

1 彼女のいない間に 大輔

駅の構内へと消えていく美雪の姿を、大輔は車の中でハンドルにもたれながら見送っていた。

昨夜、手に入れたばかりの愛しい存在なのに、この手に抱いたのはほんのわずかな時間だけ。もどかしい気もするが、仕方ない。

(さすがにねえ……親と約束してると言われたら、何も言えないっつうの)

今までの遊びの恋愛ではなく、大切にしたいと思う。だからこそ、彼女の意見は尊重したいし家族が絡むことには慎重になる。

臉の裏には昨夜の美雪の姿がちらつき、ニヤけそうになった口元をさり気なく手で覆った。

七日間の約束をした時から、その期間中に絶対に自分のモノにすると決めていた。まさか恋人にした途端に、こんなおあずけを食らうとは思ってもみなかったけれど。大人しくて何でも思い通りになりそうに見えるが、美雪は意外と芯の強いところがある。けれども、そんなところもいいと思っっている自分がいる。それは今までの恋愛では抱いた

ことのない感情で、正直驚いていた。

今日の予定がすっかり狂ってしまったことに少しだけ落胆しながら、大輔は軽くアクセルを踏み、ゆっくりと車を発進させた。

走り出して間もなくすると、携帯が鳴った。美雪からかと思いきいで車を路肩に寄せて携帯を開くが、ディスプレイには、学生来の友人である『平岡』の文字が浮かんでいた。

「もしもし」

『おっ、めずらしく出るのが早いな』

「そうか？」

『そうだよ。誰かからの連絡を待ってた、とか？』

その言い方には、何やら含みがある。

「待ってねーよ」

『……美雪ちゃんは？』

結局のところ、それを聞きたいのだろう。

「いないよ。実家に帰った。つうか、今、駅まで送ってった帰り」

「へ？ そうなんだ！」

妙に嬉しそうな声が、携帯の向こうから聞こえてきた。

『なあ、今日の夜時間があつたら、飲みに行かないか？』

「……なんでだよ」

『まあ色々、話したいし』

美雪のことを色々と聞かれるのだろうと思うと、少し気が重かった。でも、これもいい機会なのかもしれない。

「わかったよ。じゃあ十九時にいつものところで」

学生時代からよく飲みに行っている場所で約束し、電話を切った。

「なんだか飲み会続きだなあ……」

思わず独り言が漏れた。若干面倒ではあったけれど、美雪に会えない日の予定が埋まったので救われた気もする。本当ならば今日は、デートでもしようと思っていた。

それさえも約束の七日間が終わる前から予定に組んでいたと知ったら、美雪はどんな顔をするだろう。大輔の顔には、知らず知らずのうちに笑みが浮かんでいた。

「俺さ……大輔に、ずっと謝らなくちゃいけないと思ってたんだ」

乾杯も終わり一通り注文したものを平らげたところで、ボソリと平岡がつぶやいた。

ビールを飲み終え、次は焼酎のロックを口に運ぼうとしていた大輔の手が止まる。

「何のことだ？」

「……麻友のこと」

麻友は平岡の妻であり、大輔と平岡の高校時代の同級生でもある。結婚六年目にしてようやく待望の子宝に恵まれて、今はまさに幸せいっぱいのはず。それなのに何を言い出すというのか。

「そういえば！ お前、この間美雪に変なこと言っただろ」

契約彼氏六日目の日、偶然美雪に街で出会った平岡は彼女に「俺は大輔から女を奪った」と言ったらしい。そのことがあったから、自分は美雪に過去の恋を引きずる男として同情されているのではないかと大分疑ったのだ。

「変なことって何だよ。俺は本当に、お前には悪いことをしたってずっと思ってたんだ」
呻くように平岡が言った。

平岡と麻友とは、高一の時に同じクラスになった。グループ発表をきっかけに仲良くなった三人は、いつの間にか一緒にいることが当たり前になっていき、それと同時に大輔は明るく前向きな麻友に魅かれていった。視線の先が同じだったから、平岡が自分と同じく麻友に好意を寄せていることにはすぐ気付いた。

麻友のことが、本当に好きだった。それは平岡も同じだということのも充分にわかっていて、だからお互い軽はずみに手は出せなかった。三人のバランスが崩れるのが、怖かったのかもしれない。

大輔と平岡が地元の北海道を出て偶然にも同じ大学を第一志望に決めた頃、実家が

ケーキ屋の麻友は製菓の道へ進むためにフランスへの留学を決めていた。

『アイツが自分で帰ってくるまで、俺たちは見守ってやろう』

二人でそう誓い合ったはずだったのに——大学三年の夏、平岡はひとりで麻友のもとへと旅立っていた。大輔は、何も知らなかった。

大学の卒業式の時、麻友が目の前に現れた時には心底驚いた。ようやくフランスでの修行が終わって帰ってきたのだと思い、本当に嬉しかった。そして、懐かしかった。

高校を卒業した時よりも、ずっと長い髪。凛とした表情。その顔は、この四年間での成長を容易に想像させた。

綺麗になったな——言いかけた言葉が喉の奥で止まってしまったのは、当たり前のように麻友が平岡の腕を取ったからだだった。

「大輔、卒業おめでとう」

自分の顔には、きつと戸惑いの表情が浮かんでいたのだろう。平岡がわずかに大輔から視線を逸らした。

「修行、終わったのか？」

「うん。春からは、こっちで働かせてもらう予定」

目をくりくりとさせながら、まぶしいくらい笑顔で麻友が言った。

「知ってるんでしょう？ 私たち、もうすぐ結婚するの」

平岡の隣で微笑む花のような笑顔に、大輔はただひきつった笑みを浮かべるしかなかった。

「抜け駆けみたいな卑怯ひきまがなことをして、ずっと謝ろうと思っていたんだ。でも言いたくても言えなかった。お前がまだ、麻友を好きだったら……。そう思うと怖くて」

うなだれながら、平岡がさらに言葉を続けた。

「知ってた？ 高校ん時は、麻友、お前のこと好きだったんだぞ」

平岡の言葉に、目を丸くする。

「……全然知らなかった」

大輔は高校時代も割とモテる方で、ちよつとでも可愛い子から告白されると気軽に付き合っていた。その度に麻友は「こんな軽い男は絶対にイヤだ！」と言っていたのに。

「だから……お前を誘うのが怖くて、一人でフランスまで会いに行っただ。今でもたまに不安になることがあるよ。あの時会いに行っただが、俺じゃなくて大輔だったら麻友は……って」

大輔は冷たい焼酎を口に含みながら、ふと自分は本当に麻友を好きだったのかと考えた。たしかに急に二人から婚約を報告された時には、置いていかれたような気分になった。

少しだけ、裏切られた気持ちがいまだなものも否定はしない。

でも——大学生活をそれなりに満喫まんこくしていた大輔と、平岡はまったく違っていた。いづれどこか寂しげで、いないはずの麻友の姿を追っていた。大学四年間で言い寄られることはたくさんあったはずなのに、彼女を作ることもなかった。想いの差は、歴然だ。

「お前がどう思うかは勝手だけど、俺を巻き込むのはやめてくれ」

大輔の口から、ぶつさらばうな言葉が出ていた。

「美雪に余計なこと言っただけ不安にさせないでくれよ。まだ二十歳の、しかも恋愛初心者なんだから」

「大輔、でも……」

「俺は奪うばわれたなんて思っただけだよ」

平岡の話を遮さへきって、そう続けた。

「お前の方が、麻友を想ってたってことだよ。俺はわざわざ言葉も通じない国に一人で行こうなんて思わなかった。だから、麻友だってお前を選んだんだよ」

「……ありがとう、大輔」

「俺に変な遠慮しないで、麻友と生まれてくる子供を幸せにしてやれよ」

おもむろにテーブルに置かれたままの平岡のグラスに自分のグラスをぶつける。カチン、と軽やかな音が響き、二人で顔を見合せて笑う。二人の結婚以来、少しだけお互

いの心に残っていたわだかまりが、グラスの氷とともに溶けていくようだった。

「実はさあ……俺、美雪ちゃんからお前らの七日間の約束のこと聞いてたんだよね」

「は？」

平岡の思いがけない言葉に、間拔けな声が出た。

「本当は美雪ちゃんに頼まれて、彼氏のフリをしてただけなんだろう？」

「お前、そんなことまで美雪から聞き出したのか？」

「聞き出したなんて人聞きが悪いな。相談にのつたんだよ」

彼氏役のことまで、美雪が打ち明けていたとは思わなかった。

「俺は……最初から彼氏のフリだけで終わるつもりはなかったよ」

「だったらきちんと言っておけばよかったのに。美雪ちゃん、大輔は優しいから彼氏のフリを引き受けてくれてるだけだって言ってたぞ」

「……」

美雪は、どんな気持ちでその言葉を平岡に伝えたのだろう。そう思うと胸が痛む。

「あの晩、酔っぱらった大輔を美雪ちゃんに押し付けたのは俺だからさ、色々と気にしてたんだよ。でも、俺らの仲間に美雪ちゃんを紹介した段階で、本気なんだなって思ってたけど。まあでも、ちゃんと付き合うことになってよかったよ」

平岡の言葉になんと答えていいかわからず、大輔は黙ったまま焼酎を喉に流し込んだ。

「よっ！ お二人さんト」

と、聞き覚えのある声とともに背中を強く叩かれた。顔をしかめて振り向くと、そこには案の定、大学時代からの友人の小林こばやしがいた。美雪の友人から「友達もぜひ一緒に」と言われ、昨夜の飲み会にも連れていった一人だ。

「なんで二日連続でお前に会わなきゃいけないんだ……って、アレ？」

ニヤニヤと縮まりのない顔をする小林の隣に、見覚えのある女性がいる。

「たしか君は美雪の友達の……？」

「尚美なおみです。松沢さん、昨日はどうも！」

昨日会った美雪の友人の一人だ。昨夜の飲み会で二人が仲良さそうに話していることには気付いていたが、まさかもう一緒に飲みに来るような間柄になっているとは思わなかった。

「小林、偶然だなあ。美雪ちゃんの友達って？」

平岡が、驚いたように小林と尚美を交互に見比べている。

「昨日、美雪ちゃんたちと飲み会をしてさ。ま、俺は大輔にくっついて行っただけなんだけど。そこで、紹介してもらったというかなんというか」

小林の隣でべこりと頭を下げた尚美が、少し困ったように微笑んだ。

「実は先週私の誕生日だったんですけど、特に何もしまま終わっちゃって……。そ

れを昨日の飲み会の時に小林さんに話したら、お祝いしてくれるって言うんで」

「そうなんだ」

「誕生日が年末だと、みんな忙しくてなかなか祝ってもらえないんですよ」

尚美の隣の小林をちらりと見ると、何故だか得意気な顔をしている。やる事が抜け目ない……そう思いながら適当に相槌を打っていると、ハッとあることに気付いた。

「尚美ちゃん」

「はい？」

「美雪の誕生日って、いつか知ってる？」

小林と尚美が驚いた顔で大輔を凝視した。

「お前、彼女の誕生日も知らないの？」

「……まだ付き合ってた日が浅いんだよ。早生まれだっていうのは聞いてるんだけど」

くすくすと笑いを堪える平岡を軽く小突いてそう答えると、尚美は携帯を取り出しチカチと弄りだした。

「ええっと、たしかプロフィールに入ってたような……あ、美雪の誕生日は一月二十四日ですよ」

大輔も咄嗟に携帯を開き、カレンダーを確認する。土曜日だ。運がいい。

「誕生日が知らない間に終わってなくてよかったな。俺らに感謝しろよ」

「あーハイハイ。尚美ちゃんありがとね」

「素っ気ないなあ……大ちゃんって俺には冷たいっ」

泣きまねをした小林の頭を、尚美が笑いながらヨシヨシと撫でた。

「じゃあ、また。今日はありがとな」

「ああ。麻友によろしく」

小林と尚美を交えて少しだけ飲んだ後、会計を済ませて店の外に出た。互いにあっさり別れを告げ、くるりと背を向ける。しかし、駅に向かって数歩歩きだした時、

「大輔！」

と、大声で平岡に呼び止められて振り返った。

「なんだ？」

何故だか顔を緩ませながら、小走りで近づいてくる。

「すっかり聞くの忘れてた。大輔、あの日……」

「は？」

「あの日だよ。お前がしこたま飲んで酔っぱらって……美雪ちゃんが連れて帰ってくれた日！」

触れられたくない話題に触れてきやがった。思わず表情がキツくなるのが、自分でも

わかる。

「そんな顔すんなって」

大輔の無愛想な顔など見慣れているはずの平岡ですら、少し怯んで口ごもる。ひどい顔をしているのだろう。だが、そんなことはどうでもいい。

「麻友のことを勝手に話した時みたいなのに、今度こそ美雪に余計なこと言うなよ」

睨みをきかせて低い声でそう言うと、平岡が途端に、にやっと口角を上げた。

「やっぱり凶星か。あの日は風邪気味だって言ってたのに、やけにピッチが速いからおかしいと思ってたんだ。あんな風に酔っ払う大輔は見たことがなかったし、そうまでして飲みたいなんて何があったんだらうって。今日、確信したよ。今のお前が心乱される原因なんて、一つしかない」

たしかに、あの日は風邪気味で体調も悪く、飲みに行くには適していなかったことは認める。それでも飲まずにいられたの……あの日のヤケ酒の理由は、美雪ちゃん、なん

「何があったかは詳しく聞かないけど……あの日のヤケ酒の理由は、美雪ちゃん、なんだろ？」

思わず、大きく息を吐き出す。

「本・当・に、美雪に余計なこと言うなよ」

平岡は美雪のメールアドレスはおろか、電話番号も知っている。そのことが余計に大

輔を焦らせていた。

「なんでだよ？ 美雪ちゃん、知りたがってたぞ」

「……知ってる」

「大輔、それを言ったからって、別に美雪ちゃんはひけらかしたり優位に立ったりとか……」

「あー！ いいんだよ！ そのうち、気が向いたら言う」

無理矢理話を打ち切りそう言ったものの、自ら美雪に告げる気などさらさらなかった。それは平岡だってわかっているに違いない。ほん、と軽く大輔の肩を優しく叩いた。

「まあ、俺はお前らの幸せを祈っているよ」

何が幸せだ。わざとらしいセリフにふんと鼻を鳴らして横を向いた。

「じゃあ本当に、またな」

軽く手を上げて、平岡が大輔に背を向けた。軽いため息をついた後に、大輔も駅へと歩き始めた。なんだかどっと疲れが出て、美雪の声が聞きたくなった。

2 離れていても（美雪）

地元の駅で降りてからバスに乗り、見慣れた実家へと辿りつく。玄関の前には車が停まっついて、それは両親が家にいることを示している。

（あ、お母さんかお父さんに駅まで迎えに来てもらえばよかった……）

肩に食い込んだ荷物をよいしょと背負い直しそう思ってから、はたと気付く。電車の中でも大輔のことに想いを馳せるあまり、帰省する時間の連絡をすっかり忘れていた。慌てて携帯を開くと何件かメールが来ていて、それはすべて母親からだった。少しだけバツの悪い思いで玄関のドアを開ける。

「ただいまー」

「あら、美雪？ もう帰ってきたの？ 駅まで迎えに行くって何回もメールしたのに」「ごめん。連絡するの忘れてた」

居間から顔を出した母親に軽く謝りながら靴を脱ぎ、スタスタと家の中に入って荷物を置いた。カバンの中には、駅まで送ってもらった時に大輔から持たされた両親への手土産もある。

「お父さんは？」

「近所のホームセンターの初売りを覗いてくるって出かけたわ。そうそう、美雪にお土産があるのよ」

昨日まで両親は二人きりで温泉旅行に行っていた。たまに帰省した娘に、帰ってきて早々で渡すこともないのに、と軽く苦笑しながら差し出された包みを受け取る。中身はどうやら入浴剤のようだ。

「ありがとう。温泉はどうだった？」

「久しぶりにお正月にゆつくりできて、最高だったわよー！ 美雪もお友達と楽しく年越しできた？」

まあ、うん——と軽く言葉を濁しながら、大輔から持たされた紙袋を母親に差し出した。

「あー、あのー……お母さん、これ、お土産」

「え？ 何？ 美雪もどこか行ってたの？」

「いや、そういうわけじゃないんだけど」

「どこのお菓子？」

「どこって……場所はわかんない……」

「場所はわかんないって、あなたが買ってきたんでしょ？」

母親は受け取った紙袋を広げ、中を覗いた。

「これ、和菓子？ もしかして、わざわざお土産を買ってきてくれたの？ 美雪も社会人らしくなったじゃない！」

黙って受け取ってくれたら、そのままやむやにできるかも……なんて気持ちも少なからずあった。しかし、美雪の手土産だと勘違いして嬉しそうな顔の母親を見ると、いたたまれない気持ちになる。

「違う、それは私からじゃなくて、持たされただけだから。ご、ご両親にとって……」

「はあ？」

きょとんとした顔で、母親は美雪を見上げた。

「ご両親に？ どうして？ 美雪の上司からとか？」

うっと言葉に詰まる。昔から、無駄なところでカンが鋭い母親だった。上司であることには間違いない。でもこの状況で、それは正解とは言えない。

「合ってるけど違う……。それ、彼氏から」

「は？ 彼氏？ 誰の？」

「……この話の流れで『誰の？』はないでしょう」

呆然としたままの母親の隣をすり抜け、キッチンへと向かう。冷蔵庫を開け、お茶を取り出したところで、母親の驚いた声が背中に降りかかる。

「彼氏!! 美雪、彼氏できたの？ 誰？ どの人よー？」

「疲れたから、ちよつと部屋行く！」

母親の質問から逃げ、お茶を持ったまま二階の自分の部屋へと飛び込んだ。階下からは、まだ母親が何か呼びかける声が聞こえる。

(両親に彼氏のことを話すのって、こんなに照れくさいもんなんだ……)

初めての経験に戸惑いながら、ドアに背を預けてため息を吐いた。

買い物に出かけていた父親が帰宅すると、美雪への質問責めはさらにヒートアップした。一人っ子ということもあり両親の干渉を時々過剰に感じることもあったが、今回は格別だ。照れくさくて美雪がはつきりと答えないことに、父親はみるみる不機嫌になった。

「美雪、明日は何時に帰るつもりなんだ？」

久しぶりに三人そろって夕食を囲んでいる時、唐突に父親が言いだした。

「特に決めてないけど。午前中はこっちでゆっくりして、午後くらいかなあ」

あまり早くに帰るのは両親に悪いが、大輔にも会いたい。夕方までに帰れば、夜に一緒に食事くらいならできるかもしれない。そう思って密かに顔を綻ばせた美雪に気付いたのか、父親の眉間の皺しわが深くなった。

「明日はお父さんが車で送っていく。マンションまで行ってやるから、それなら遅くなくても大丈夫だろう」

「え、でも」

思わず箸を持つ手が止まる。

「困ることもあるのか？」

父親の横で、母親がパチパチと目配せをした。父の機嫌を悪くさせるな、今回は送ってもらえとその目は言っている。

「ううん、困らないよ。送ってくれたら助かる……」

「じゃあ、夜ご飯はうちで食べるといい。その後、送ってやるから」

「うん……ありがとう……」

大輔と会えるのが一日延びるくらい、なんでもない。これも親孝行、そう自分に言い聞かせてみても寂しい気持ちは拭えず、すっかり気落ちしてしまった。機嫌のよくなった父親からの質問をかわしつつ、ノロノロとお風呂を済ませて自分の部屋へと戻る。

「やっぱ『好きな人がいる』っていうのと『彼氏ができた』ってのでは、親にとっては全然違うのかなあ……」

元々母親とは友達のように仲が良く、高校生の頃までは好きな人のことも気軽に話していた。多分、その話は父親にも筒抜けだったと思う。しかし茶化されることもなければ問い詰められることもなく、ごく普通に接してしてくれたのに。

無意識に携帯を手に取り、大輔は何をしているのだろうとほんやり思う。

(電話、してみようかな。いつでもかけてこいって言ってくれたし……)

壁にかかった時計に目をやると、時刻は二十三時を回っていた。友達にかけるのなら、少し躊躇する時間帯。でも、相手が彼氏なら、セーフなのだろうか。

無難にメールにしとこうか、と思った次の瞬間、マナーモードにしたままだった携帯が突如手の上でブルブルと震えだした。

「わっ！」

開いた画面に映るのは、『松沢大輔』の文字だ。じつくり三コール分、呆けたように見つめた後、慌てて通話ボタンを押して携帯を耳にあてた。

「もっ、もしもし？」

『よう。寝てたか？』

「どうしたんですか？」

『用がなきゃ、かけたらダメなのか？』

「いえ！　そういうわけじゃ……」

思いもよらない拗ねたような言い方に、頬が熱くなる。駅での別れ際に電話をしてもいいですかと聞いたのは美雪の方だったけれど、かけるだけの勇氣はなかった。そんな自分を大輔が気遣ってくれた——なんて思うのは、都合が良すぎるだろうか。

『何してた？』

「特に何も。自分の部屋でぼんやりしてました。大輔さんは何してましたか？」

『実は今、帰ってきたばかり。平岡と飲みに行ってたんだ』

「えっ、また今日も飲みに行ってたんですか？」

昨日も飲み会だったのに。もしかして昨日は飲み足りなかったのだろうか。

『しょうがないだろ。……お前がいらないんだから』

大輔の声が少しだけ艶つぽく聞こえ、胸がドキンと鳴った。微妙な声色の変化に気付かないほど、鈍くはないと思う。けれども恋人の雰囲気にはまだ馴染めなくて、咄嗟に話題を変えてしまう。

『そ、そういえば……お母さんが、お菓子ありがとうございますって』

『そう。なんて言ったの？』

すんなりと美雪が変えた話題に乗ってくれたことに、ほっと胸を撫で下ろす。

『ちゃんと、彼氏からって言いましたよ』

『へえ、ちゃんと言えたんだ』

『それくらい言えますよ！』

子供扱いされ少しだけムキになって声のボリュームが上がると、携帯の向こうからはくすくすと笑う声が聞こえてきた。

『じゃあ俺からも、「おせち美味しかったです」って伝えておいて』

『え』

美雪としてはこれ以上、両親と彼氏の話をするのは遠慮したかった。わざわざこちらから蒸し返して、色々聞かれるのは耐え難い。

『……言えたら言います』

『ちゃんと言えよ』

はぐらかすような返事をした美雪の意図は筒抜けだったのか、大輔に念を押され、思わず黙り込んだ。

『なんだ？』

「……大輔さんから頂いたお菓子を渡した途端、質問責めにあっちゃって、なんとかか誤魔化し続けて部屋に逃げてきたところなんです。意外な反応で、こっちも戸惑っちゃって……」

『かわいい娘に初めて彼氏ができたんだから、聞きたくて当然だろ』

かわいい娘というのはともかく、実家を出て一人暮らしをしている娘に初めて彼氏ができたとなると、心配するのは当たり前なのかもしれない。恥ずかしいからできればもう少しだけ両親には内緒にしておきたかったのに、大輔にはそれを許さない雰囲気があった。

『ちゃんと話しとけよ。今後のためにも』

その言葉には、彼の真剣な想いが込められているようだ。

「……はい」

緩む頬を押さえ、ためらいながらもしつかりと返事をした。ふっと笑ったような吐息が耳元に小さく聞こえ、何故だかぞくぞくと総毛立つ。この声を、もっと聞いていたい。

「あの……」

『なに?』

ささやくような声が、また耳の奥に響く。何か言わなければ会話は続かない。会話が続かなければ、彼の声を聞くこともできない。わかっただけでも言葉が出てこなくて、沈黙してしまふ。

『……どうした?』

黙り込んだ美雪を促すような、低いけれど優しい声が聞こえて、思い切って口を開いた。

「あの、大輔さんの電話の声って、かっこいいなって思ってた……」

わずかに息を呑む音が聞こえ、ほんの少しの沈黙の後、照れくさそうな声が届いた。

『そりゃ、どうも』

（あれ、もしかして大輔さん……照れてる?）

八個も年上で、恋愛初心者の自分とは違い大人な彼。職場のデキる上司でもある大輔は、常に美雪にとっては隙のない存在だ。——そんな彼が、照れてる? 嬉しさが込み上げてきて小さく笑っていると、その後と言われた言葉にやられた。

『電話でお前の声を聞くのも、悪くはないけど……やっぱり会いたいな』

破裂しそうな胸をぎゅゅと掻き抱く。

「そつ、それ……反則です……」

はははと高らかな笑い声が響いた。やっぱり彼にはまだまだ敵わない。

『明日、何時頃に帰ってくるんだ?』

真っ赤になった美雪が見えるわけではないだろうが、さり気なく話題を変えてくれたことにほっとした。けれど、先ほどまでの父親とのやりとりを思い出すと気が重い。

「それが、ちょっと遅くなりそうで……。父親に、うちまで送ってもらうことになりそうなんです」

『なんで? 荷物でもあるのか?』

訝しげな大輔の言葉に、慌てて弁解をする。

「いえ、あの、たまに、送ってもらうこともあるんです。正月休みで、父も暇みたいで……」

『そうか。それじゃあ次に会うのは会社でだな』

あっさりとなだめた大輔の言葉に、少しだけ落胆する。今すぐにでも会いたいと思っているのは、恋人同士になれたことに浮かれているのは、自分だけなのだろうか。

『そう……ですわね』

気付かれないように、そっと息を吐く。

『いつでも会えるだろ』
 「そうなんですけど……なんか昨日のことが夢みたいで、イマイチ信じられなくて」
 言ってから、少し焦った。「昨日のこと」とは思いが通じて彼女になれたことを指して言ったつもりだったけど、身体を重ねたことだと思われたらどうしよう。

「あつ、あの、昨日のついでというのは、べつにっ」

「……じゃあ、明後日の仕事、少し早めに来いよ」

慌てる美雪の声を遮って、甘い声が聞こえた。

「えっ?」

『仕事始めてやらなきゃいけないことも多いし、俺は元々早く行くつもりだったから。

無理にとは言わないけど……』

「いっ、行きます!」

囁みながらも大声で返事をした自分が恥ずかしい。それを茶化すように、大輔が笑った。

『元氣いいな』

「だって……少しでも早く会いたくて」

これくらいの甘えは、許されるだろうか。耳に押しあてた電話の向こうから、大輔の息遣いが聞こえる。

『ああ……俺も。じゃあ、明後日の朝、会社で』

「はい。おやすみなさい」

『ん、おやすみ』

通話を切った携帯を、ぎゅうつと頬に押し当てた。

「ああー! もう! 『俺も』 って言ってくれた!! なんだか嘘みたい……」

好きという気持ちが増える。ベッドの上でジタバタしながら、夢のような状況にひたつた。

興奮して、どうやら今日もゆっくり眠れそうになかった。

3 予定外と予想外 大輔

あつという間に正月休みは終わり、仕事始めの日。長い休み明けの出社は、いつもな
 ら気が重い大輔だが、今日は違っていた。

美雪と一緒に帰れるだろうか。重役以外の社員は会社の駐車場を使えない。一日中パー
 キングに置くとお金もかかるが、それでも車で通勤することを選んだ。

自分で思っている以上に、もしかしたら彼女にハマっているのかもしれない。

フロアには案の定、一番乗りだった。暖房をつけたばかりでまだ肌寒い中、パソコン

をつけてたまったメールをチェックする。今日は朝イチで会議もあるし、仕事は山積みだ。途中で買ってきた缶コーヒーを飲みながら、頭の中で一日の予定をたてていた。

「おっ、おはようございます」

足音に気付き視線を上げると、タンブラーとバッグを片手に顔を赤らめた美雪がいた。「ああ、おはよう」

たった二日ぶりだ。それなのに、思わず彼女を見つめ続けてしまいそうになる。このままフロアにはマズい。

「藤崎、資料室につきあってください」

「はっはい！」

デスクから立ち上がって声をかけると、荷物をデスクに置いた美雪が慌てて返事をした。フロアを出て大股で歩く大輔のうしろに、パタパタという足音が続く。振りかえりたい気持ちを堪え、辿りついた資料室のドアを開けた。

「あの……？」

先に入るように促すと、不思議そうな顔で見つめてくる。

「いいから」

美雪に続いて大輔も中に入り、ドアを閉める。

カチャリという音で、美雪はドアにロックをかけたことに気付いたようだ。

「……主任？」

「大輔、だろ？」

会社だから遠慮してそう呼んだのだろう。それは充分にわかっていたが、つい訂正してしまう。美雪の口から、自分の名を聞きたかったから。

「でも」

彼女の言い訳を全部聞くことなく、顎に手をやり上を向かせると唇を重ねた。触れた唇からは、甘いコーヒーの味がする。わざとゆっくりと顔を離すと、真っ赤な顔をしながら美雪が抗議してきた。

「こっ、こんなところで……」

「こんな時間に誰も来ない」

まだ何かを言いたそうな美雪の口を塞ぎ、熱い舌を押し込んだ。資料室は各課から離れたところがあり、通勤時にわざわざこの前を通る社員はいないに等しい。そのことを知らない美雪がしきりに廊下を気にする様子に、嗜虐心がそそられる。

「んっ……」

わずかに開いた美雪の口の隙間から、堪え切れなかった甘い吐息が漏れた。唇の端から滴りそうになった唾液を絡め取り、そっと胸元に光るネックレスに手を伸ばすと、美雪がびくりと身体を震わせた。額と額をつけて少しだけ口元に距離を作ると、焦点の

合わないところとした目が、ゆっくりと大輔の視線を捕らえた。

「あ、あの……大輔さ」

「時間、ないから」

彼女の背中に手をまわし、さらに深く唇を重ねた。

「おはようございます」

「あけましておめでとうございます！」

社員が続々と出勤してくる中、デスクで仕事を始めていると、大輔より大分遅れて美雪がフロアに戻ってきた。

「おはようございます……」

上気した顔を見られないように時間までにゆっくり戻ってこいと言ったのに、慌てたようにフロアに足を踏み入れた美雪の顔は、ほんのり赤かった。一瞬大輔に恨みがましい目を向けた後、黙ってデスクにつく。その様子がおかしくて、ニヤニヤと口角が上がりそうになるのを堪えて唇を引き締める。

「会議に行ってくる」

ファイルを脇にかかえてフロアを出て行く時にもう一度美雪に視線を送ると、俯いた彼女の頬はまだ赤いままだった。

新年早々の会議は、予想よりもさらに時間がかかった。次年度に向けての大きなプロジェクトとして、社内全体に新しいシステムが導入されることを告げられたのだ。その統括マネージャーが大輔が任命された。課長を通して以前から聞いていた話ではあったが、自分が責任者になるとは思っていなかったので驚いた。大がかりなプロジェクトのため、残業続きの日々になることは必至だ。大輔にとってはこれが、情報課に異動になったから一番大きな仕事になるかもしれない。

仕事はやりがいがあるし、上司から頼りにされているのも充分にわかる。それでも、美雪と過ごす時間がしばらくはゆっくり取れないことが、ほんの少し残念だった。

昼休憩をはさみながらの会議が終わった頃には、陽が傾いていた。当分の間はこんな日が続くかもしれないと思い、大きく伸びをしながら会議室を出て情報課のフロアに戻った。まだまだ仕事が残っている。

「お先に失礼します」

ためらいがちにかげられた声に、パソコンの画面からハッと顔を上げた。少し不安そうな顔をした美雪が、こちらの様子を窺っている。プロジェクトのスケジューリングに没頭しているうちにいつの間にか終業時間が過ぎ、社員もまばらになっていることに気付かなかった。

「ああ……お疲れ」

ペコリと頭を下げてフロアを後にする美雪のうしろ姿を、少し切なく見送った。あくまで今は、上司と部下だ。二人の付き合いを隠したいわけではないが、美雪の性格を考えると大っぴらにするのは憚られた。総務課にいる大輔の元彼女が美雪に嫌がらせをしたこともあったし、他にもそんな女性社員がいなくとも限らない。

ため息をつきながら缶コーヒーでも買に行こうと椅子から立ち上がった時、胸ポケットに入れていた携帯が震えてメールの着信を告げた。急いで携帯を確認すると、送信者は先ほど帰ったばかりの美雪だ。

『お疲れ様です。今日は遅くなりそうですか？』

少し考えてから、正直なメールを送る。

『ごめん。しばらくは残業が続くと思う』

一緒に帰れたらとせっかく車で来たのだが、無駄になったようだ。ようやく始まった恋愛なのに、二人きりで会えない寂しさが頭をよぎる。でも仕事だから仕方ない。

仕事人間と周りに言われている自分が、まさか仕事を邪魔に思う日が来るとは――。大輔は首をガシガシと掻きながら、フロアを後にした。

「やまだ山田、このデータに目を通しておいて。あと各課のパソコンの配分台数、総務に確認しといてくれ」

「わっかりました〜」

「課長、業者との打ち合わせに行ってきます」

「ああ、よろしく」

慌しい一週間の最終日、金曜。各所に指示を出した後、自分も外出するためコートを手でフロアを出る。ちらりと美雪に目をやるが、仕事に集中しているのかその視線はパソコンに向かったままだ。美雪とろくな会話もできないまま、一週間を終えようとしていた。新しいプロジェクトが始まり、忙しいのは責任者の大輔だけではない。美雪も同じだ。お互いがお互いに気を遣って、眠る前に送り合うメールはいつも簡潔で、どうにもどかしい日々だった。

（今日……金曜日くらいは、少し早く帰ろう）

まだまだ忙しい日々には変わりないけれど、今日くらいはいいだろう。会社の階段を小走りで下りながら、そう考えていた。

打ち合わせが終わって会社に戻ると、大輔の机には書類が山積みになっていた。ため息が出そうになるのを堪え、デスクにつく。提出された部下の書類のチェックなどしながら黙々と作業をこなしていると、気付けば他の課との打ち合わせに行っている課長をのぞく全員が退社していた。課に戻った時にはいたはずの美雪も、いつの間にか帰っている。

「よし、ひとまず終了っと……」

誰もいないフロアで、つい独り言が漏れた。ファイルを保存してふっと息を吐く。美雪は、もう家に着いているだろうか。

仕事に追われ大した変化のない一週間だったが、話したいことはたくさんある。時間は遅いが明日は休みだし、少し顔が見たい。家に寄らせてもらおうか、それとも……

そんなことを考えながら帰り支度を始めると、課長がファイルを抱えてフロアに戻ってきた。

「松沢くん、今日の仕事は終わったのか？」

「お疲れ様です、課長。ひとまず今日のノルマは。まだまだやることは山積みですけどね」

「そうか。君には苦勞をかけるなあ」

デスクの上にきちんとファイルを並べ、課長にしては珍しく小さなため息をついた。

「ハードワークなのは、課長だって同じじゃないですか」

「いや、新システムの導入に関しては、君に丸投げしてるようなものだし……。どうだ？ 軽く飯でも食べていかないか」

「えっ」

書類を整理していた手を止めた。

「何か用事でもあったかな？」

「いえ。課長から誘っていただくの、珍しいなあと……」

誰もが認める愛妻家で仕事が終わると主婦が常の課長が、自分を食事に誘ったことに驚いた。どうしようか。こういう付き合いが大事な痛いほどわかってはいるが、正直疲れはピークだ。恋人になったはずの美雪とは会社以外で全然会えず、フラストレーションもたまっている。この時間からでは、さっさと食事だけすまして終わりというわけにもいかないだろう。

「何か予定があるのらないんだが……少し、君にも話しておきたいことがあって」

課長がそんな含みのある言い方をするのは珍しかった。何か大事な話があるのかもしれない。大輔はほんの少し迷った末に、戸惑いながらも誘いを受けた。

課長の運転する車で、会社から離れたところにある日本料理店へと案内された。カウンターに並んで座りながら、漂う香りに腹が鳴り、自分がかかなり空腹だったことに気付く。「君がウチの課に来てくれてもうすぐ二年だな。期待以上にがんばってくれてる。周りの評価も高いよ」

「ありがとうございます」

控えめにそう言って、運ばれてきた生ビールに口をつける。冷えたビールが喉を通りぬけるのがたまらない。目の前に置かれた、からりと揚がった天ぷらに、遠慮なく箸をつける。

「うまいです！」

「そうか」

課長が、にっこりと笑った。あつという間に天ぶらの皿が空になり、今度は煮魚がカウスターに並んだ。若い頃は洋食が好きだったはずなのに、年を重ねることにこういう和食が好みになっていく気がする。勧められるままに、今度は煮魚に箸をつけようとした。

「部下のことは、どう見ている？」

唐突な質問に箸を止める。咄嗟とつさに美雪の顔が浮かんだ。

「どう……とは？」

「松沢さんに鍛えられて、山田くんあたりは大分実力がついてきたと思うんだが」

（なんだ、仕事のことが……）

当たり前なのに、ほっと胸を撫で下ろす。

「そうですね。山田はもうちよっと地に着いたら、大きな戦力になると思います」

「そうだな。なかなか打たれ強いところもあるし、彼の今後は楽しみだ」

課長は、ちびちびと本当に美味しそうに日本酒を飲む。車の運転は、代行を呼ぶつもりらしい。

「成田なりたは、予想以上ですね。部下を指導する力もあるし……このまま、仕事の幅を広げてがんばってほしいです」

「藤崎さんは、どうだ？」

「藤崎は……」

一呼吸おいて答える。

「がんばっていると思います。人づきあいが苦手なのが少し気にかかりますが……本人が持っているスキルは高いと思います」

「そうか」

満足そうに腕組みをした課長が、大輔のための生ビールを追加で注文した。

「君には、本当に頑張ってもらっている」

「いえ……まだまだです」

うんうんと頷く課長を見ながら、なんだか妙な違和感を覚えた。けれど今は空腹感が勝る。申し訳ないと思いつつ、話の合間を見ながら目の前に置かれた料理を平らげている。課長はというと、刺身やおひたしをゆっくりとつまみながら、相変わらず日本酒を口にしている。大輔の前に行くつももの空の皿が並んだ頃、ようやく一息ついた。

課長が飲んでいるのと同じ冷酒が目のおかれ、それに口をつける。キンと冷えた日本酒はさっぱりとしていて喉越しがよく、飲みすぎないように気をつけようと頭の片隅で考える。

「実は」

大輔が日本酒に手を伸ばすのを待っていたかのように、課長が口を開いた。

「まだ先の話だが……君に異動の話が来ている」

「え？」

小さなグラスを持つ手が微かに揺れた。

「異動……ですか？」

「本当なら、もう一年うちの課にいてほしかったんだけどな。引く手あまたで、断ることは難しそうなんだ」

そう言いながら、課長はこくりと静かに冷酒を飲んだ。つられるように大輔も口に含む。

(異動、か……)

咄嗟に返事ができず、しばし黙り込む。元々営業課にいた大輔にとって、情報課は二年か三年の約束での配属だった。それは、その頃営業で順調に成績を伸ばしていた大輔を手放すのが惜しくて、当時の営業課長が人事に押しつけた条件だ。いつか異動になるのはわかっていたこととはいえ、新しいプロジェクトが立ち上がったばかりということもあり、まさか今その話が出るとは思わなかった。まだまだこの課で学ぶことはたくさんあるし、部下に教えなければならぬことだ。こんな状態で情報課を去るのは、正直、中途半端で不本意だ。

(どうして今……)

そう言おうとして、口を噤んだ。課長に言ったところでどうにもならないだろうし、それが会社の命ならば、仕方ない。美雪と同じフロアで仕事ができなくなるのは少し残念だが、同じ社内にいることは変わらない。むしろ、別の課の方が周りの目を気にしなくていいかもしれない。

「異動は、やっぱり営業課ですよね？」

当然と思ったが一応聞いてみたところ、課長が微妙な顔をした。

(なんだ?)

大輔の心に、一抹の不安がよぎる。

「いや」

少しの間を置いて、きつぱりと課長が否定した。

(営業以外って、今さら広報とか? まさか総務とか……)

そんな大輔の不安をよそに、課長は驚くべきことを言った。

「君に来てる異動の話は……本社での異動じゃない」

「というと」

「転勤だ。大阪支社の、営業課に」

思いも寄らないことに、言葉が出ない。大輔は口元に運ぼうとしていたグラスを、そのままコトンとカウンターに戻した。

「君が以前、営業課にいたころ……辻くんは世話になっただろ？ 彼からの打診だ」
 「辻さんから？」

入社したての頃、教育係として世話になったのが当時の本社営業課主任の辻だった。数年一緒に仕事をした後、彼は希望を出して実家のある大阪へと転勤になっていた。

「いつか、機会があればまた一緒に仕事をしよう」
 そう言われて、柄にもなく目頭が熱くなったのを覚えている。大輔にとって、尊敬する先輩の一人だった。

「彼は大阪支社で営業課の課長に就いてるんだが……今、大阪の方はあんまり成績がよくなってね」

その噂は聞いたことがあった。

「辻さんがいても、ですか？」

「彼一人の力では限界があるから」

眉をひそめて、言いにくそうに課長が言う。

「ずっと大阪というわけじゃない。それは辻くんもわかっていると思う。二、三年で戻ってくることも君なら可能だろう」

また期間限定か。思わず吐きそうになったため息を呑み込む。本当に、ちゃんところらに帰ってこられるのだろうか。今、こうやって思いもかけない転勤話を聞いている自

分には信じがたい。

「まだ正式な話ではないんだ。辻くんから営業の方に打診があったばかりでな。君が情報課に来たのを、知らなかったらしい。ただ営業課の上層部は随分乗り気だ」

今日、課長が打ち合わせと言って営業課に行っていたのは、少なからず自分のこともあったのだろう。

「当然、断る権利もある。私だって、君を出したいわけじゃない」

「……」

「ただ、今大阪に行くことは、長い目で見ればきっと君のプラスになると思う。ひとまず、今月いっぱい考えてみるといい。そのうち辻くんからも直接連絡があるだろう」

直接辻と話したら、なおさら断れる気がしない。

「何か、ひっかかることもあったかな？」

一瞬、美雪のことを話そうかと心が揺れた。だが、まだ付き合いだしたばかりという事実が大輔の気持ちを留めさせる。

「いえ。突然のお話だったもので、考えがまとまらないだけです」

今この状況で、美雪とのことを課長に話してどうなる。

「たしか、君は引越したばかりだったなあ」

そうだ。年末に見つけたあのマンションは、二年契約だ。大輔の気持ちを知ってか知

らずか、課長は励ますように背中を強く二度叩いた。

「本当に、送らなくていいのか？」

代行業者に車のキーを渡しながら課長が言った。

「はい。ここからだど割と近いんです。課長の家とは反対方向ですし……」

一人で頭を整理したい気持ちもあった。それがわかるのか、課長も強引に誘うことはなかった。

「そうか。松沢くん、今日の話は課のみんなにはまだ……」

「わかっていきます」

そう言って軽く笑ってみせた。

「君には本当にがんばってもらっている。できれば異動の時には、君の望む最高の形でうちの課から出してやりたかったんだが……私の力不足だな」

「そんな、とんでもないです！」

寂しそうな課長の言葉に、慌てて手を振り否定する。

「ゆっくり考えてくれ。断ってくれても、悪いようにはしないから」

「……ありがとうございます」

課長の心遣いに胸を打たれ、深々と頭を下げた。大輔の肩に優しく手を置いた後、課

立ち読みサンプルはここまで

長は自分の車の後部座席へと乗り込んだ。二台の車が夜の街へと消えていくのを、ぼんやりと見送った。

はーっと長い息を吐く。腕時計に目をやると、もう日付が替わる寸前だ。

美雪の顔が見たい。声が聞きたい。

疲れと衝撃で頭がパンクしそうだ。スーツのポケットから携帯を取り出すと、メールが来ていた。課長と一緒にの時にはサイレントにしていたので、気付かなかった。

『今日も遅いですか？ 身体に気をつけてくださいね』

一時間以上も前に届いたメールだ。たった一行の素っ気ないメールだが、美雪はどんな気持ちで送ったのだろう。もう寝てるかもしれない。そう思ったけれど、結局は美雪の携帯へと電話をかけていた。

『もしもし』

ワンコールで携帯に出た美雪は、わかりやすく嬉しそうな声色だった。久しぶりに聞いた彼女の声に、口元が緩む。

「今、大丈夫か？」

『ハイ、全然大丈夫です！ 主任……じゃなかった、大輔さんはもしかして今帰りですか？』

「ん……課長とちよつと飲んでて」